

和服に関する実態と意識

— 高校生，大学生，母親を対象として —

鮎田 崎子

(被服学研究室)

(昭和60年10月11日受理)

I 緒 言

衣生活文化は着ることの文化である。着ることの文化は着ること（着装），着るもの（衣服），着るものをつくること（技術）の領域に分けることができる。そして，これらがいかなる様相を呈するかは，生活文化，政治，経済の変転，思潮の反映，戦乱・和平の影響，科学技術の発達など歴史的，社会的条件に規定せられる。

和服は日本の自然環境の中で，日本人の手により創り出された衣服である。明治時代に西洋の服が輸入されて，洋服と呼ぶに対し，在来の日本の衣服を和服と呼称するようになった。そして，現在，一般に着用されている日本在来の衣服を和服と総称している。

和服の源流をなす衣とされる小袖が長着として完成したのは室町時代の末期より桃山時代にかけてとされている¹⁾。藤原時代までの貴族たちは，大きな袖の衣服を用いた。その下着としての内衣に，白の平織や綾織の絹地でできた袖幅の狭い白小袖を着ていた。一方，庶民にあつては，男女とも袖幅の狭い，そまつな白小袖を用いていた。産業や経済の進展とともに，色小袖，模様小袖へと発展し，公家，武家の下着としての白小袖と一体となって，小袖と帯の着装形態が完成した。こうして，民族服といえる和服形式ができ上がって後，江戸時代を経て現代に至るまで，和服の基本形態に大きな変化がない。

しかし，明治維新以来，洋風化の影響をうけて，我が国の衣生活は洋服の進出，和服の退却の道をたどることになる。その様相は次のように要約できる。

洋服はまず男性に着用された。軍人，官人，警官などの制服ないし労働着によって男性の洋装化が推進された。

女性の洋装化は男性より大幅におくれた。男性の洋装が増えた大正期に入っても，女性はまだ和服中心であった。大正12年の関東大震災のあと，再建の動きの中で洋装化が促進された。子供，女学生，職業婦人の洋装化がはやい。都市部からはじまり，農山漁村部へと移っていった。一般女性間に洋服が定着するのは昭和初期からであり，本格的な洋服生活時代に入ったのは第二次大戦以後となる。和服を捨てて，洋装になったのは，働くのに快適で，生活上の能率化の観点からなされてきた。その過渡期には，その可否が論じられてきた。そして現在，和服は日本人の日常生活から姿を消し，大多数の日本人は洋服中心の生活を送っているようにみえる。

従来，被服教育の中で，和裁教育は重要な位置を占めていた。しかし，こうした衣生活の

変化に伴い、現在、小・中・高校段階の被服教育の中で和服の取り扱いが極めて少なくなっている。

本学においては、被服学の専門教科の中の被服構成学に関する平面構成学習の場として、和服の被服実習を開講している。筆者も昭和55年以来、その一部を担当してきた。

和服は洋服と異なり、仕立て方にも細かな約束ごとがある。学生にとって和服製作は初めての経験であり、難かしいと訴えながらも興味をもって取り組んではいる。しかし、機能的で自由で軽快な服装を求める傾向にある若い女性にとって、和服とは何なのか、和服をどのようにとらえ、どう活用しているのだろうか常々疑問に思ってきた。

筆者は先に、女子学生の衣生活に関する調査を試み、現代社会における衣生活状況を所持衣服や着方、製作状況の面から探り、被服教育を総合的立場から推進していくための資料を得た。2) 自宅生か自宅外生(寮, 下宿生活)かによって起こる住空間や経済面の差, 学年によって異なる社会とのかかわり方の軽重なども衣服の所持, 選択, 着装などに影響を与えていることが明らかとなった。女子学生の衣服の取得, 調整, 着用, 製作に関する行動や意識は複雑である。

学生が所有している服種については24種を掲げて調査した。ブラウス, ワイシャツ, Tシャツ, ポロシャツ, スカート, セーターの4種類の衣服は100%の人が所持し, 着用している。24種類のうち, 和服については次の4種をあげたところ, ゆかたは87.7%, ゆかた以外の和服が74.2%, 喪服23.8%, 和式ねまき7.1%の者が所有しているという結果が出た。洋服が主流の現代の衣生活において, 7割以上の人が和服を所有しているということから, 和服も学生にとっては意味を持つ衣服の1つといえそうである。

そこで, 今回, 和服について更に深く, 実態調査を行い, 現代女性と和服のかかわりをとらえることによって, 現代社会の中での和服のあり様を明らかにして被服教育のための資料を得ることを意図したものである。対象は高校生と大学生及び高校生の母親とし, 若い女性の反応をとらえるとともに, 母親を加えることによって年齢による変化の様相も把握しようとした。

II 研究方法

調査の方法は質問紙法によった。調査の時期は昭和56年6月下旬。調査対象は松山市内高
表1 回答者の属性

居住地域	高校生		大学生		母親	
	人数	%	人数	%	人数	%
農山漁村地域	58	26.5	75	30.7	53	24.8
商工業地域	17	7.8	26	10.7	15	7.0
住宅地域	140	63.9	135	55.3	135	63.1
不明	4	1.8	8	3.3	11	5.1
合計	219	100.0	244	100.0	214	100.0

年齢・職業	母親		
	人数	%	
年齢別	30代	26	12.1
	40代	175	81.8
	50代	11	5.1
	不明	2	0.9
職業別	家事専業	88	41.1
	常勤	44	20.1
	パート	25	11.7
	自営	33	15.4
	不明	25	11.7

校2年生女子219名、愛媛大学教育学部女子学生3年244名、母親として高校生の母親に依頼した214名で、その内訳は表1に示す。回収率は高校生99.1%、大学生100%、母親89.9%である。

調査内容は次の通りとした。

1. 和服についてどう思っているか 2. 和服の所有、新調、調整希望、活用状況 3. 和服の着用状況（着用の機会、場所、着用頻度など） 4. 着装に関して 5. 縫製に関して 6. 将来の衣服設計の中にどんな和服を持ちたいか。

III 結果と考察

1. 回答者の属性

回答者の居住地別、母親の年齢、職業別構成を表1に示す。高校生、大学生、母親とも住宅地域の居住者が多く、次いで農山漁村居住者である。母親は40代が8割以上を占め、家事専業者と常勤者が2：1の割合になっている。

資料については、高校生、大学生、母親間の分析を行い、年齢による差異をみるとともに、それぞれの居住地域別と母親の年齢、職業別分析も行ったが、主に高校生、大学生、母親間について考察し、その他は有意差の認められた項目のみについて取り上げることとした。

2. 和服についてどう思っているか

1) 和服はすきか（図1）

和服はすきかきらいかについて質問したところ、高校生の58%、大学生の66.4%、母親の54.7%が好きと答え、きらいは4.5~6.5%である。大学生に好きな率が高く、大学生と母親間に5%水準で有意差がみとめられる。

高校生と大学生の居住地域別には有意差が認められない。母親では農山漁村より商工業地居住者に、パートより自営業者に好きな者が多く有意差が認められる。50代は好きな者が多いが5%水準で有意差はない。

2) 好きな理由（図2）

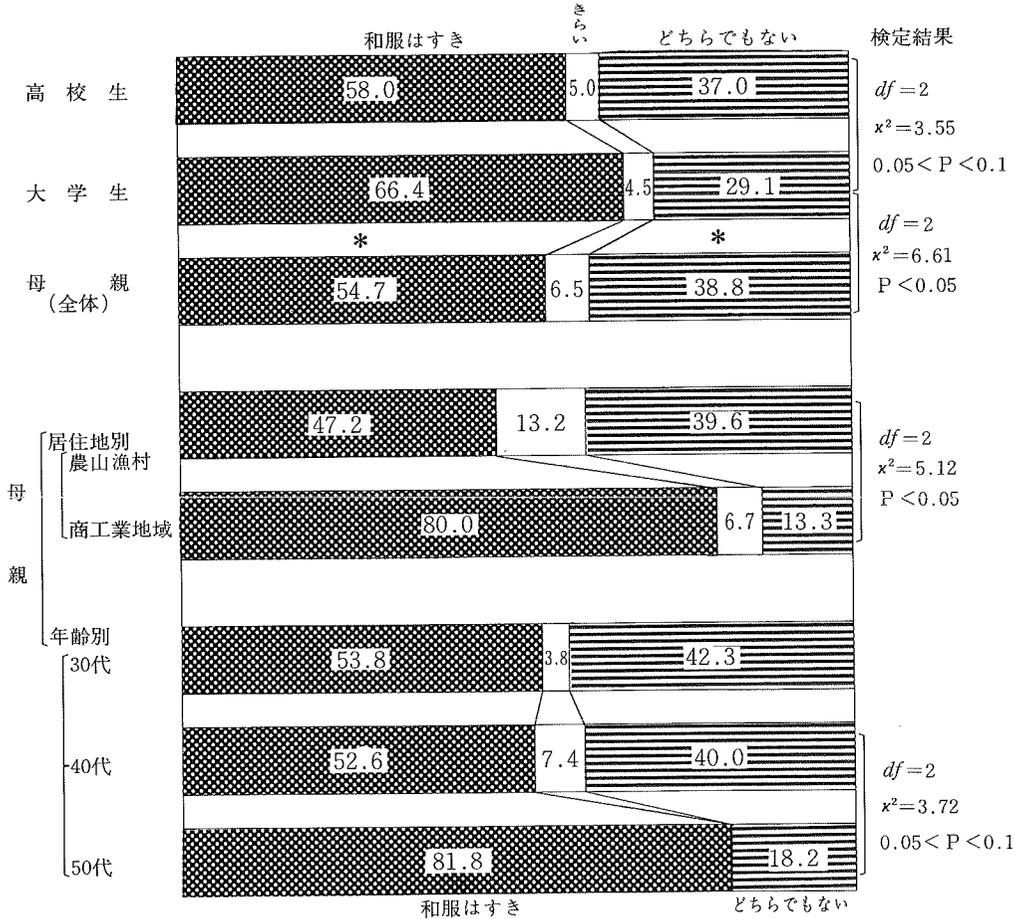
理由を3つまでの複数回答でたずねた結果である。

「上品で優雅であるから」を高校生75.6%、大学生75.3%、母親66.7%があげており、いずれも最上位の理由となっている。

高校生、大学生はともに「上品で優雅であるから」「美しいから」「日本の伝統ある民族服として大切にしたいから」が和服の好きな三大理由となり、他の理由のあられ方においても「なんとなく」以外は有意差はない。上位にあげられる理由は、きもの姿から受ける雰囲気や外観から答えているものが多い。「なんとなく」の回答が高校生に多いのは、高校生は和服を大学生より距離をおいて遠くから、あこがれの気持で見ている者が多いことをあらわしている。

母親は「上品で優雅であるから」につづいて、日本の伝統ある民族衣裳として大切にしたいから（35.9）、形が変化しないでいつまでも着用できるから（34.2）が多く、美しいから（26.5）、自分に似合うから（24.8）、体型がカバーできるから（23.1）、着ているとあたたかいから（15.4）の回答がみられ、和服を美しいと思う感情的な面と洋服のように激しい流行がな

図1 和服は好きですか



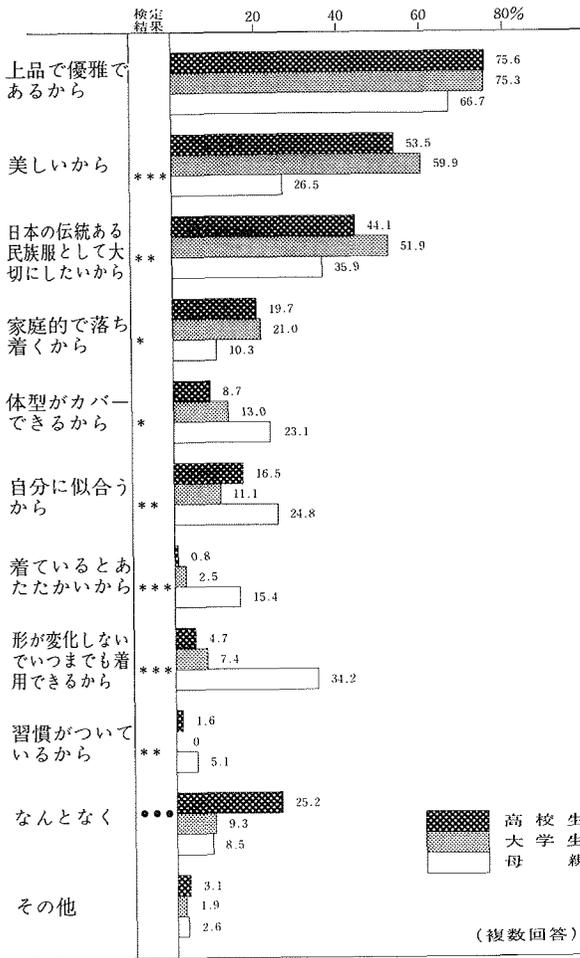
くて長く着用でき、また少々体型が変化しても長期間着用できるといった実的な面の二面から見ている。

「体型がカバーできる」「着ているとあたたかい」「形の変化がなくいつまでも着用できる」等、着用経験から実用に則したあるいは和服の持つ長所を理解した理由が学生（高校、大学生）より高い率であらわれ、有意差が認められるところに大きな特徴がある。

3) きらいな理由

和服をきらいとする者は少なく、高校生5%、大学生4.5%、母親6.5%である。その理由は「活動的でない」「体をしめつけて窮屈」「着付がむつかしい」「自分に似合わない」をあげており、機能性に欠ける点が主なものである。母親の「着用後の手入れがわずらわしい」は着用経験から出ている理由で学生より高い。

図2 和服は「好き」の理由



χ²検定による ● 高校生－大学生間、* 大学生－母親間を示す

● P<0.05 ●● P<0.01 ●●● P<0.001 有意差あり

(複数回答)

4) どちらでもない理由 (図3)

高校生、大学生、母親とも「和服の良さもわかるが欠点もあるのだ」と和服の長所と短所がその理由となっている。「和服をよく知らない」のは母親より高校生、大学生に多く、「興味がない」のは大学生より高校生に多い。高校生、大学生は特に和服を着る機会がないか或いは少なく、和服をよく知らない、興味がないにつながっているものと思われる。

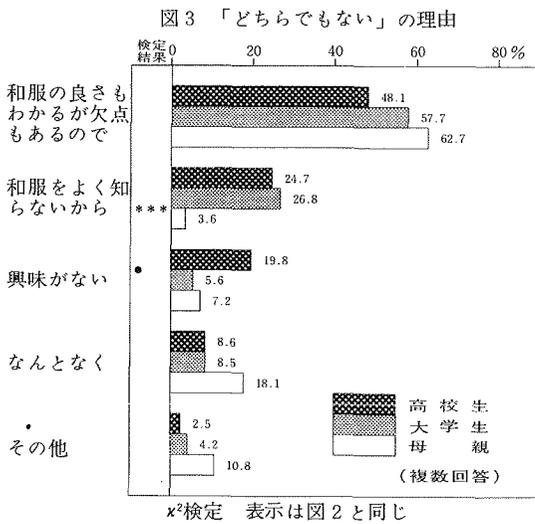
3. 和服の所有、新調、購入希望、活用状況 (表2)

和服の種類は裁断上から大裁(大人物)、中裁(子供物)、小裁(乳児物)に、着用者別には男物、女物、子供物(四つ身、三つ身、一つ身)に、仕立て方からは単衣、袷、綿入れに、形の上からは長着、羽織、襦袢、帯、コート等に分類される。

また、材質の違いから用途が異なってくる。長着を取り上げても綿入れ、袷、単衣の仕立て上の区別があり、更に、単衣長着は材質上から木綿、絹、麻、毛、化学繊維までであり、礼服から着古した浴衣のねまきまで含まれ、非常に広範囲にわたる。

本報で取り上げた和服の服種は基本的なものとし、高校生、大学生、母親を対象としている関係上、用途も考慮し、女物大裁単衣長着をゆかたとゆかた以外の単衣長着に、女物大裁袷長着は留袖、振袖、訪問着、喪服の儀礼服とその他の袷長着(普段着、外出着等)に区分し、羽織、帯、コート、洋服の上にも簡単に羽織れる防寒用半てん(綿入れ)、寝具用ねまきを加え12種類とした。12種類の和服について、現在所有している和服、現在までの1年間に新調した和服、今欲しいと思っている和服、所有しているけれど1度も着用したことのない和服が一枚でもあるかどうかについて尋ね、その結果を表2にまとめた。高校生と大学生、大学生と母親間の有意差をχ²検定により求め、表中に示した。

1) 和服の所有状況



和服の所有状況を服種別にみると次のようである。

高校生については、所有率が高いものは、ゆかた（74.9%）であり、次いで帯（47）、半てん（32.9）、単衣長着（22.8）、羽織（18.7）などである。和服を1枚も持っていない人は12.8%ある。

大学生で、所有率が高いのは、ゆかた（94.3%）、帯（76.2）、振袖（61.5）であり、次いで単衣長着（41.0）、半てん（40.6）、羽織（28.7）、袷長着（25.0）、訪問着（20.9）である。和服を1枚も持っていない人は1.6%である。

高校生と大学生を比べると、どの和服も大学生の所有率が高く、半てん、和服式ねまきを除いて有意差が認められる。

中でも、振袖は高校生の10.5%に対し、大学生は61.5%が所有しており、特徴的である。成人式のために振袖を新調している人が多いことを物語っている。振袖のほか、訪問着や喪服など儀礼用和服の所有率が大学生の方が特に高い。和服を持っていない人が高校生の12.8%に対して、大学生は1.6%と激減しているのも特徴的である。

商工業地域居住の高校生の袷長着と帯の所有率が農山漁村居住者より高く、5%水準で有意差が認められる。

母親について、90%以上の所有率を示すものは帯、羽織、喪服であり、70~90%はゆかた、和服式コート類、袷長着、訪問着、単衣長着である。安価で入手しやすく、かつ取り扱いも比較的簡単と思われるねまきや半てんの所有率は低く、特別な場合にしか着用しない高価な和服の所有率が高い。

ただし、ゆかた（87.4）は例外で、この高い所有率は、ゆかたが夏の風物詩として夏祭りや盆踊りに欠かせないものになっていることを示している。

同じ儀礼服でありながら、喪服が90.2%、留袖が46.7%とその差が大きいのは、一般に「葬」の儀式を重んじる意識が高いこと、また、調査の対象が高校生の母親ということで、まだ留袖を必要とする年齢に達していないことが原因と思われる。

所有枚数については、各々の最大枚数を表3に示した。袷長着、帯、ゆかたの枚数が多い。所有枚数に学生別、地域別有意差はみられず、これは、個人差である。留袖、振袖、喪服については着用の場が決まっているため、所有枚数にあまり差がない。母親の所有枚数は袷長着、単衣長着、羽織に30枚、50枚の所有者がいて個人差が著しく、掲載を省略した。

2) 和服の新調状況

期間を1年間に区切って新調状況を見ると、「新調したものはない」人が多く、高校生68.0%、大学生44.7%、母親60.7%を占める。なかでは大学生の新調した割合が高く、大学生と高校生、大学生と母親間に0.1%水準で有意差が認められる。

新調した和服としては、高校生はゆかた（16.0）、大学生は振袖（19.3）、帯（14.3）、母

表2 和服の所有、新調、購入希望、未活用状況

(%)

	所 有 状 況			新 調 状 況 (注2)			購 入 希 望 状 況 (注3)			未 活 用 状 況 (注4)		
	高校生	大学生	母 親	高校生	大学生	母 親	高校生	大学生	母 親	高校生	大学生	母 親
1. ゆ か た	74.9 ※※※	94.3 ※※	87.4	16.0	16.4 ※※※	5.6	32.0 ※※※	13.5 ※※※	4.2	1.8 ※	7.0 ※※	16.0
2. 単衣長着 (ゆかた以外)	22.8 ※※※	41.0 ※※※	75.2	8.7	7.4	5.1	6.4	4.9	1.4	20.0	16.0 ※※	31.7
3. 留 袖	3.2 ※	7.4 ※※※	46.7	0.0	4.1	5.6	6.4 ※※	14.8	15.9	14.3	55.6 ※※※	4.0
4. 振 袖	10.5 ※※※	61.5 ※※※	6.1	1.8 ※※※	19.3 ※※※	0.5	42.5 ※※※	15.2 ※※※	0.5	26.1 ※	8.7	7.7
5. 訪 問 着	7.3 ※※※	20.9 ※※※	75.7	2.3 ※※	8.6	8.9	11.9 ※※※	38.5 ※※※	15.0	25.0 ※	58.8 ※※※	4.3
6. 袷長着 (留袖・振袖・訪問着以外)	12.8 ※※※	25.0 ※※※	77.1	3.7 ※	9.0	14.5	5.0	7.0	12.1	21.4	36.1 ※	20.0
7. 喪 服	0.9 ※※※	9.0 ※※※	90.2	0.5	2.5	1.4	2.7 ※※※	11.9 ※※	5.1	100.0	86.4 ※※※	6.2
8. 羽 織	18.7 ※	28.7 ※※※	95.3	5.9	5.3 ※※	13.1	9.1 ※	4.5 ※	8.9	17.1	22.9	16.2
9. 帯	47.0 ※※※	76.2 ※※※	96.3	6.8 ※※	14.3	20.6	12.8	9.8 ※	17.3	5.8	8.1	13.6
10. 和服式コート類	1.8 ※※※	9.0 ※※※	79.4	0.0	2.5	5.6	3.2 ※※	10.7	8.4	25.0	45.5 ※※※	8.2
11. 防寒用半てん	32.9	40.6 ※※	53.7	4.1	3.3	1.4	4.1	3.7	0.5	0.0	2.0	3.5
12. 和服式ねまき	3.2	6.1 ※※※	56.5	0.0	0.4	0.5	3.7 ※	0.8	0.5	0.0	13.3	8.3
13. そ の 他	2.3	5.3	6.1	0.9	0.4	0.0	0.5	0.4	0.5	0.0	7.7	0.0
14. (注1)	12.8 ※※※	1.6	0.9	68.0 ※※※	44.7 ※※※	60.7	29.2	26.6 ※※※	47.2			

注1. 14には所有状況は「一枚も持っていない」
 新調状況は「新調したものはない」 } が入る。
 購入希望状況は「ほしいものはない」

注2. 1年間に新調した人数の割合

注3. 今欲しい和服のある人数の割合

注4. 所有している人数に対する一度も着用したことがない和服のある人数の割合

注5. 有意差は χ^2 検定による。高校生-大学生, 大学生-母親間を示す。* P<0.05 ※ P<0.01 ※※ P<0.001で有意差あり

表3 所有最大枚数 (枚)

	高校生	大学生
1. ゆかた	4	5
2. 単衣長着 (ゆかた以外)	3	4
3. 留袖	1	2
4. 振袖	2	2
5. 訪問着	1	6
6. 袷長着 (留袖・振袖・訪問着以外)	10	8
7. 喪服	2	2
8. 羽織	2	3
9. 帯	4	8
10. 和服式コート類	2	3
11. 防寒用半てん	2	3
12. 和服式ねまき	2	2

親は帯(20.6)、袷長着(14.5)が多い方である。

高校生と大学生間では振袖、訪問着、袷長着、帯に有意差が認められ、大学生は社交着としての和服を新調している傾向が高校生より強い。

地域別にみると高校生のゆかたと帯の新調率が商工業地域居住者の方が他の地域の居住者より高く、大学生の袷長着の新調率が商工業地域、住宅地域居住者の方が農山漁村地域居住者より高い。母親では帯と半てんにおいて自営業者が、単衣長着において50代の人

高く、有意差が認められる。

勿論、和服の新調率は洋服類に比べると全般に低い。

3) 調整希望状況

今欲しいと思っているものは、高校生では振袖(42.5)、ゆかた(32.0)、大学生では訪問着(38.5)、振袖(15.2)、留袖(14.8)であり、両者間に有意差が認められる。

大学生は普段着より、格の高い和服を求める傾向にある。高校生の調整希望が振袖とゆかたに集中しているのに対し、大学生は訪問着から和服式コートまで幅広く分散している。「ほしくないものはない」に有意差はない。

取得希望の低いのは、高校生では喪服、和服式コート、ねまき、半てんであり、大学生ではねまきと半てんである。喪服やコート類は大学生は比較的新調を希望し、高校生との間に有意差が認められる。

所有率との関係を見ると、所有率が低く、取得希望率が高い即ち、持っていないから欲しいと考えているのは、高校生では振袖、大学生では訪問着、留袖、喪服、和服コートとなり両者の年代の差があらわれている。所有率も新調希望もともに低いのは、高校生では喪服、和服コート、ねまき、大学生ではねまきである。

いずれにしても、高校生、大学生はともに7割以上の人がある和服を欲しいと思っているという結果となり、これから和服を求める世代といえる。

母親は47.2%の人が「欲しいものはない」と答えている。和服の所有率が高いこと、60.7%が新調した和服はないとしていることを考えあわせると、母親達は現在持っている和服でほぼ満足しているようである。しかし、中では帯を17.3%が希望している。帯は96.3%という最高の所有率であり、1年間に購入した新調率も20.6%と一番高い。帯によって和服のイメージが変わるとも言われるように、帯を新しくすることにより、和服生活の変化を楽しん

でいるようであり、母親の和服生活において帯は重要な役割を果たしている。

4) 和服の活用状況

この数字は所有している和服のうち、これまで一度も着用したことがないものが一枚でもある人の割合を示す。数字が大きいことは所有していても着用していないことで活用度の低さを示す。

高校生では、防寒用半てん、和服式ねまき、ゆかた、帯の活用度が高い。所有率の高いゆかた、帯、防寒用半てんは活用度も高く、高校生によく着用されている和服といえる。活用度の低いのは喪服、振袖、訪問着、和服式コートである。

大学生では、防寒用半てん、ゆかた、帯、振袖の活用度が高い。これらは所有率も高く、大学生によく着用されている和服といえる。活用度の低いものは、喪服、訪問着、和服式コート、裕長着である。訪問着、裕長着は所有状況でみたように、所有枚数の個人差が大きく、1人で6～10枚持っている人もおり、所有枚数が多いために、全体として活用度が低いという結果が出たと思われる。

高校生と大学生間では大学生の方が全般的に活用度が低い。大学生は高校生より所有率が高いがそれほど着用機会が多くないということであろう。

母親の場合は儀礼服でなく、かつ用途はいろいろあり、所有枚数の多い単衣長着や裕長着の未活用率が31.7%、20%と高い。喪服や留袖は高い所有率を示しながら未活用率は6.2%、4%と低く、よく活用されている服種である。このことは、和服が日常生活から離れ、儀礼的な、特別な場合のものになっていることを裏付けるものである。

4. 着用状況

1) 着用の機会・場所について (図4)

設問「今までどんな時に和服を着用しましたか」に対する回答結果である。

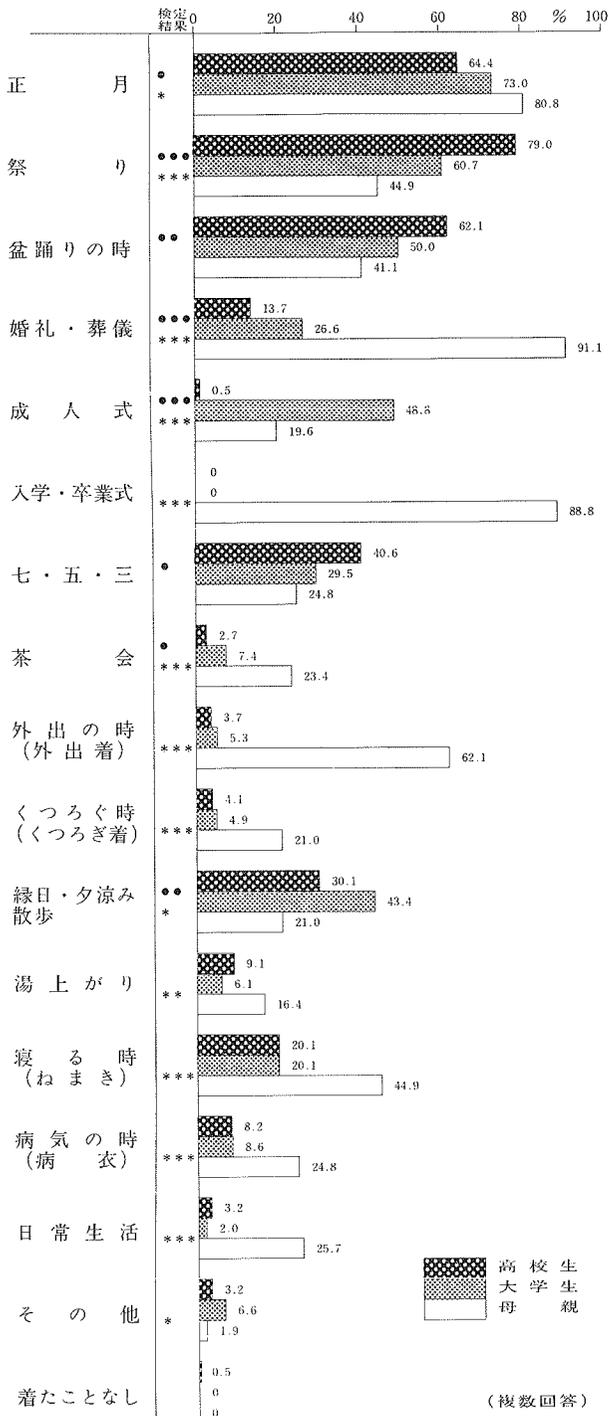
高校生は祭り(79%)、正月(64.4)、盆踊り(62.1)に60%以上の人が着用経験があり、次いで七・五・三(40.6)、縁日・夕涼み・散歩(30.1)、寝る時(20.1)である。高校生が和服を着用するのは主として特別の行事の時といえる。所有率と考えあわせると、夏祭り、盆踊り、縁日にはゆかたが、正月や秋祭りには単衣長着としてのウールの着物と羽織のアンサンブル形式のものが着用されていると読み取ることができる。

大学生は正月(73.0%)、祭り(60.7)、盆踊り(50.0)、成人式(48.8)が高く、他に、縁日・夕涼み・散歩(43.4)、七・五・三(29.5)、婚礼、葬儀の時(26.6)、寝る時(20.1)となる。

高校生と大学生間には、正月、祭り、盆踊り、婚礼葬儀、成人式、七・五・三、お茶会、縁日・夕涼み・散歩に有意差が認められる。高校生の方が高いのは祭り、盆踊り、七・五・三の時、大学生の方が高いのは正月、婚礼葬儀、成人式、お茶会、縁日・夕涼み・散歩の時である。大学生になると成人式のほか婚礼葬儀など公式の場に和服を着用する機会が増している。両者とも特別な時に和服を着用しており、日常生活に和服を着用する人は極めて少ない。

地域別に分析すると、高校生では正月、七・五・三において、農山漁村地域居住者より商工業地域居住者が和服をよく着用している。大学生では正月、成人式、盆踊り、縁日・夕涼み・散歩に農山漁村地域居住者より、商工業、住宅地域居住者が和服をよく着用しているという結果が出た。これは、農山漁村地域においては、社会教育的立場から祭りや成人式に豪

図4 着用の機会・場所



χ²検定による ● 高校生-大学生間, * 大学生-母親間を示す

● P<0.05 ** P<0.01 *** <0.001 有意差あり

華な和服着用の自粛を働きかけているところがあるためであろうか。

母親は80%以上が婚礼葬儀(91.1%), 入学・卒業式(88.8), 正月(80.8)に和服を着用した経験があり, 母親の年代にとって, 和服は特に儀礼服として着用されていることが明らかである。しかし, 日常生活, くつろぐ時, 緑日・夕涼み・散歩などにも20%余りの着用があり, ねまきとしても44.9%が着用したことがあるとし, 学生と比べ, 日常着としての着用も比較的多い。祭り, 盆踊り, 緑日・夕涼み・散歩には学生の方が高くあらわれているが, 他の機会は母親の着用が高く, 学生との間に着用時の差が認められる。

地域別には商工業地域の人が茶会, 湯上がり, 日常生活において農山漁村地域や住宅地域の人より優位に多く利用している。年齢別には茶会, 外出の項で50代の着用が多い。

2) 着用頻度 (図5)

過去1年間の着用頻度を調べたところ, 高校生では1年間に全然和服を着用しなかった者が37.9%ある。年1~3回着用した者が51.1%を占める。

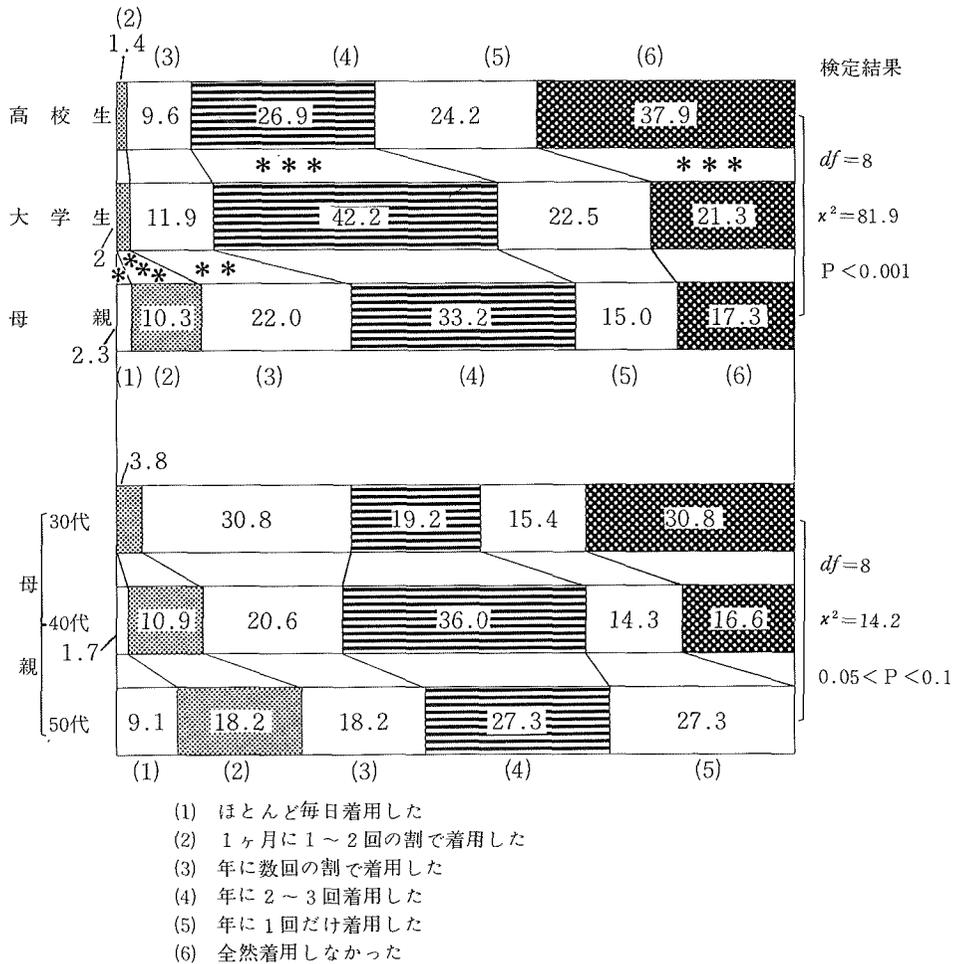
大学生では全然着用しなかった者が減り, 21.3%である。年2~3回着用した者が増え, 年1~3回着用した者が64.7%となる。

ほとんど毎日着用したのは高校生, 大学生とも皆無である。

全然着用しなかった人が高校生の商工業地域に少なく, 他地域との間に有意差がみられる。着用回数も商工業地域居住者が多い。

和服に関する実態と意識

図5 着用頻度



母親では過去1年間に全然着用しなかった人は17.3%である。大学生に比べ、それほど減少していないが、ほとんど毎日着用した人が2.3%、1ヶ月に1~2回の割合で着用した人が10.3%、年に数回の割合で着用した人が22.0%あり、着用頻度において学生との間に有意な差が認められる。自営の人、50代の人々の着用回数が多い。

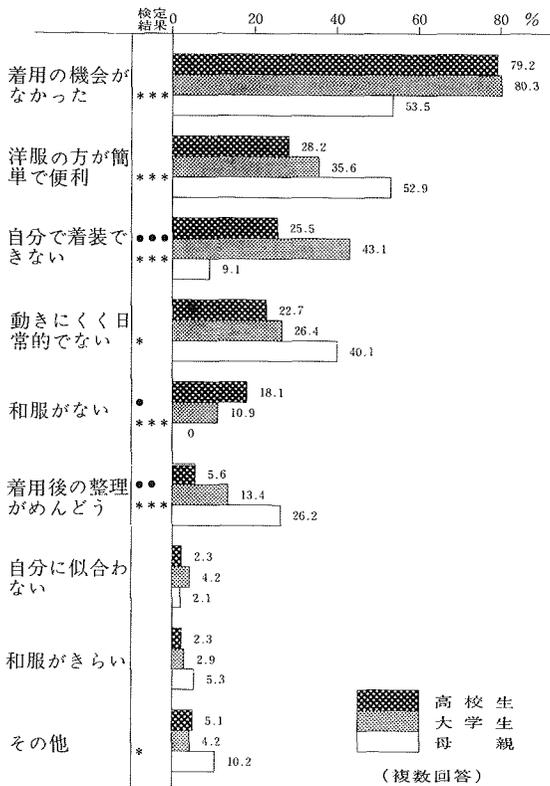
3) 着用回数の少ない理由 (図6)

着用が全然ないか、あっても年数回までの人(前項3~6の回答者)に着用回数の少なかった理由をたずねたものである。

高・大学生とも「着用の機会がなかった」が大きな理由となっている。次いで、「洋服の方が簡単で便利」「自分で着装できない」という結果である。「和服がない」は高校生に、「自分で着装できない」「着用後の整理がめんどろ」は大学生に多く、大学生には和服着用後の感想が出ている。

地域別には高校生において「洋服の方が便利」「動きにくく、日常的でない」「着用後の整理がめんどろ」の項目で、商工業地域と他の地域の居住者間に有意差が認められる。和服を

図6 着用回数が少ない理由



よく着用しているとみられる商工業地域の方は和服を着用した経験からこれらの項目がより強く出たものと思われる。

母親の上位の理由は「着用の機会がなかった」「洋服の方が簡単で便利」「動きにくく、日常的でない」であり学生との間にいずれも有意差が認められる。「着用の機会が少ない」は学生より低い、機会があっても「洋服の方が便利」「和服は動きにくく、日常的でない」など和服の非活動性をあげる者は学生よりも多く、又、「着用後の整理がめんどろ」と整理・保管のわずらわしさもあげている。自分で着られないとか似合わないといった着装技術や好みに関することは着用回数が少ない強い理由になっていない。「動きにくく、日常的でない」は農山漁村居住者より商工業地域居住者に、40代より50代に高く、有意差をもってあらわれ、商工業地域居住者及び50代の方が和服の非活動性をより強調している。着用経験が高いこと

からきているものと思われる。

5. 和服の着装に関して (図7, 表4)

着用回数の少ない理由として「自分で着装できない」を高・大学生はあげているが実際はどれくらい自分で和服を着ることができるのであろうか。

「ほとんどの和服を自分で着装できる」のは高校生、大学生とも極めて少ない。「ゆかたならできる」を合わせても自分で着ることができるのは高校生23.3%, 大学生43.8%であり、高校生の76.7%, 大学生の56.7%は自分でゆかたも着装できない状況である。大学生の方が着装できる率は高い。高校生の商工業地域居住者に自分で着ることができる率が高い。和服を着る機会が多いほど自分で着装できる率も上っている。

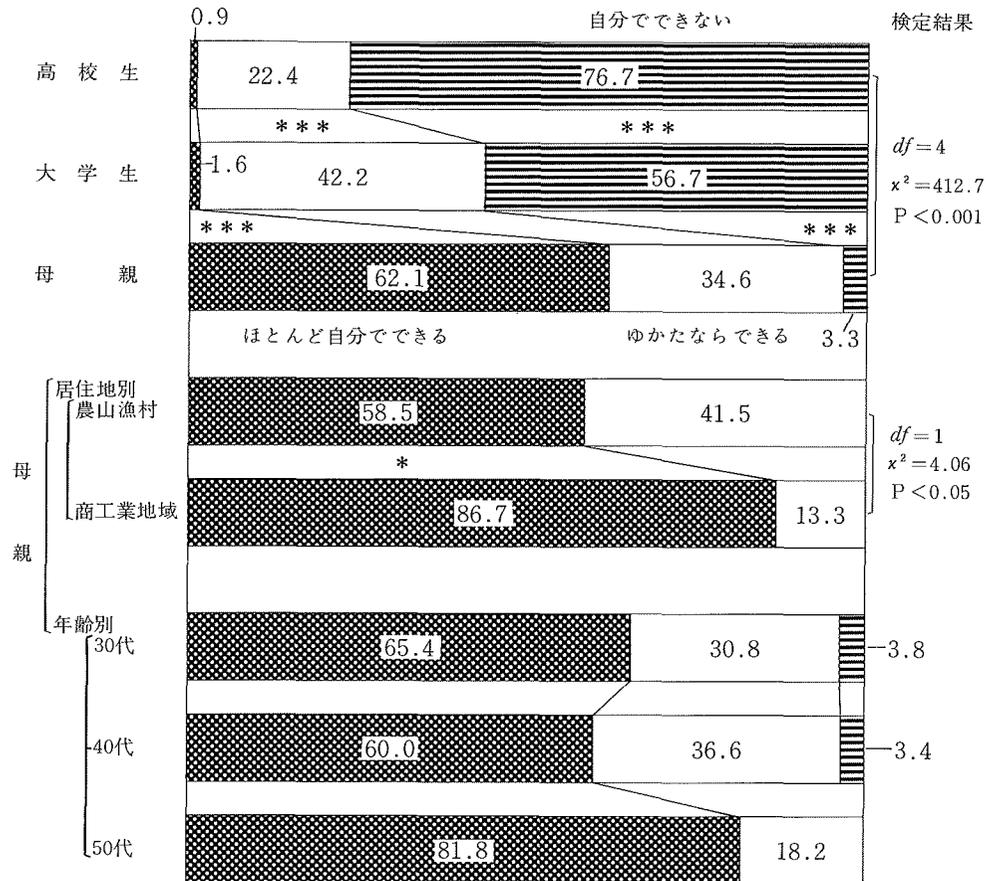
着ることができる人に、着方を習ったところをたずねた。高・大学生は「祖母や母に習った」が多い。「特別習わなかった」も比較的多く、見よう見まねでなんとなく着れるようになったという人である。

これに対し、母親は「ほとんどの和服を自分で着装できる」が62.1%あり、「ゆかたなら着装できる」(34.6%)を加えると母親の96.7%は着装の技術を身につけていることになる。

着用頻度の高かった商工業地域居住者は着装状況もよい。50代には自分で着装できない者がなく、30、40代に比べ、着装のより高度な技術を身につけていると思われる。

着装の技術は「祖母や母に習った」が多いが、学生よりは比率が低く、「着付教室」や「知

図7 和服の着装について



人」に習った人が学生より高い。

「祖母や母に習った」「雑誌を参考にした」「テレビを見た」の3項目において商工業地域居住者が農山漁村居住者より高く、有意差が認められ、農山漁村居住者は「特別習わなかった」が最上位になっており、商工業地域居住者の方が技術の習得方法が具体的である。年齢別では「祖母や母に習った」が50代に多く、年齢の上るほど祖母や母が指導の源となっていたことがわかる。

6. 和服の縫製に関して (図8, 表5)

和服の縫製については、高校生で「ゆかたなら縫える」と答えた者が1人いたが、どこで習ったかは不明であった。

大学生は「ゆかたなら縫える」(21.4%)、「袷長着も縫える」(0.4%)をあわせて21.8%

(53人)が「縫える」と答え、78.2%は「自分では縫えない」となる。縫えると答えた53人のうち、家庭科専攻・専修生が45人(84.9%)含まれ、家庭科専門教科の学習結果が包含されており、これを除くと大学生も高校生同様、縫えない人がほとんどということになる。

どこで習ったかについては、「学校で和裁教育を受けた」が多いが、専門教科受講済みの学生が多い結果である。他に、「祖母や母に習った」

「知人に習った」「雑誌を参考にした」などみられ、情報入手の経路は多くなっている。

母親は、「袷長着も縫える」(25.7%)、「ゆかたなら縫える」(41.1)となり、学生よりは多いが、袷長着などの高度な縫製技術を身につけている人は $\frac{1}{4}$ である。自分で縫えないが33.6%おり、着装技術に比べ、縫製の技術を身につけている人は少ない。

縫製技術の習得方法については、学校で和裁教育を受けた(35.0%)、祖母や母に習った(31.5)、専門学校で習った(18.9)、知人に習った(18.9)となる。50代の人が30、40代よ

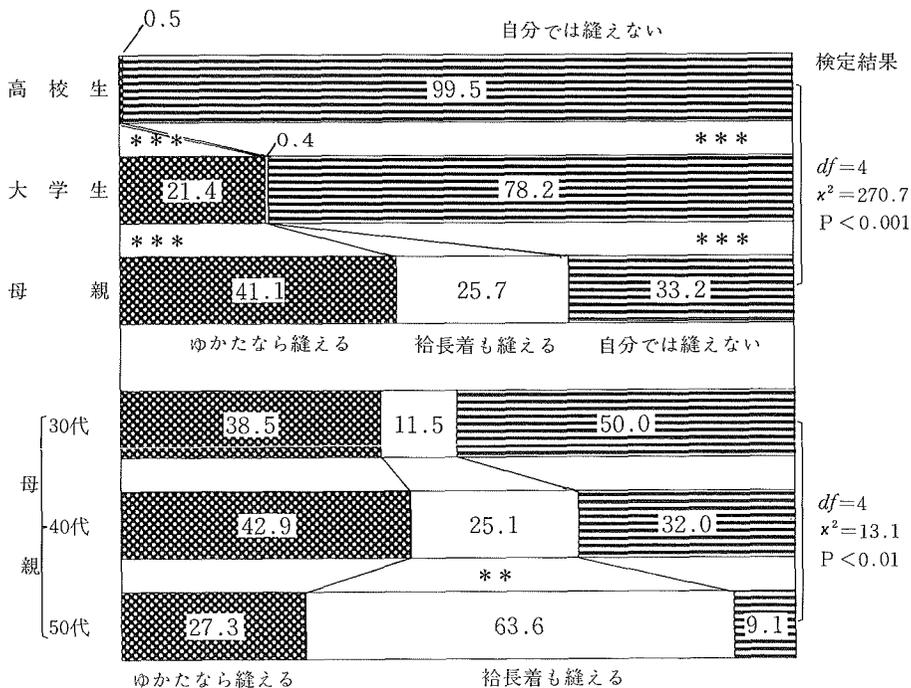
表4 和服の着方を習ったところ (%)

	高校生	大学生	母親
学校で習った	3.9	0.9	1.4
着付け教室で習った	2.0	2.8	23.2
祖母や母に習った	62.7	63.6	45.4
知人に習った	2.0	1.9	11.1
雑誌を参考にした	2.0	7.5	9.2
講習会を受けた	0.0	0.0	5.3
テレビを見て	0.0	0.9	4.8
特別習わなかった	37.3	29.0	26.1

(複数回答)

注 「着ることができる」人数(高校生51、大学生107、母親207)に対する割合

図8 和服の縫製について



和服に関する実態と意識

表5 和服の縫製を習ったところ (%)

	高校生	大学生	母親
学校で和裁教育を受けた	0.0	83.0	35.0
専門学校で習った	0.0	0.0	18.9
祖母や母に習った	0.0	13.2	31.5
知人に習った	0.0	1.9	18.9
雑誌を参考にした	0.0	1.9	8.4
講習会を受けた	0.0	0.0	1.4
テレビを見て	0.0	0.0	0.0
不明	100.0	1.9	11.9

(複数回答)

注 「縫える」と答えた人数(高校生1、大学生53、母親143)に対する割合

り、「袷長着も縫える」「学校で和裁教育を受けた」人が多く、有意差が認められた。

7. 将来の衣生活設計の中で持ちたい和服(持たせたい和服)(表6)

人生の1つの転機として結婚し、新生活を営むにあたり、生活の変化が衣服にも多少の変化をもたらす。結婚時に和服を調達する慣習は今なおあるようだが、若い世代はその時どんな和服を持ちたいと思っているのだろうか。具体的には、「結婚する時持ってい

きたい和服」を、母親には「持たせたい和服」をたずねた。

50%以上の者があげているのは、高校生では、訪問着、帯、ゆかた、喪服、羽織であり、大学生では訪問着、帯、喪服、ゆかた、羽織、留袖となる。

「持っていくつもりはない」は高校生が12.8%、大学生は2.5%であり、大学生の方が和

表6 将来の衣生活の中で持ちたい和服(持たせたい和服) (%)

	高校生	大学生	母親
1. ゆかた	64.8	66.8	※ 77.1
2. 単衣長着(ゆかた以外)	26.9	22.5	※ 49.5
3. 留袖	44.7	※※ 59.4	※※※ 42.5
4. 振袖	38.8	※※※ 21.7	※※※ 46.3
5. 訪問着	66.7	※※※ 81.1	77.6
6. 袷長着(留袖・振袖・訪問着以外)	28.3	27.0	※※ 63.1
7. 喪服	60.7	※ 70.5	※※ 82.7
8. 羽織	59.4	63.5	※※※ 86.0
9. 帯	65.3	73.4	※※※ 88.3
10. 和服式コート類	32.9	※ 43.4	※※※ 63.1
11. 防寒用半てん	15.1	15.2	※※ 25.7
12. 和服式ねまき	7.3	3.7	※※※ 17.3
13. その他	2.3	3.7	4.7
14. 持っていくつもりはない	12.8	※※※ 2.5	5.1

注 ※ P<0.05 ※※ P<0.01 ※※※ P<0.001 で有意差あり

服に対する興味が高くなっている。又、両者とも留袖、訪問着、喪服に人気が集まり、和服のフォーマル化が若い年代にも固定しつつある。

母親が娘の結婚する時に持たせたいとする和服は娘達が持ちたいと思うより更に多い。喪服や訪問着などの儀礼服が多く、防寒用半てんや和式ねまきなど日常的な和服の希望は低い。しかし、ゆかたは例外的な存在で、日常的な性質を持ちながらも、現在の衣生活の中に根づいているといえよう。

母親自身の和服の着用頻度や未活用状況と考え合せると、所持している和服が十分に活用されていないことは経験的にわかっているはずなのに、持たせたいとする高い数値は、衣生活の中で和服が合理性や実用性のみでは割り切れない要素のあることを示すものである。地域別、職業別に有意差は出なかったが、年齢別には多くの有意差がみられる。即ち、単衣長着、裕長着、和服式コート、ゆかた、和服式ねまきについて、年齢が上るにつれ、持たせたいとする率が上っている。年齢が上るほど、和服についての経験が豊かになり、和服の不便さも感じている反面、和服の捨て難い良さにも気づき、娘にも持たせたいという気持が強くなるものであろう。

IV 要約・結論

高校生、大学生、母親を対象に和服に関する実状を調査した。その結果は次のように要約される。

○ 和服は好きという人は50%以上いる。その理由として、上品で優雅な調和美と伝統文化の良さをあげている。母親は「いつまでも着用できる」「体型がカバーできる」「着ていてあたたかい」等着用経験から和服の良さを理解した理由をあげている。

和服はきらいは約4～6%であり、「体を締めつけて窮屈」など機能性に欠けることが理由となっている。

○ 年齢が上るにつれ和服の所有率が高くなっている。特に儀礼的な服種にその傾向が強い。

ゆかた、帯はどの年代も所有率が高く、よく着用されている。

母親の喪服、留袖の所有率が高く、かつ活用度も高い。

○ 1年間に新調した和服で多い服種は、高校生はゆかた、大学生は振袖、帯、母親は帯、裕長着である。高校生の68%、大学生の45%、母親の61%は1年間に和服を新調したことがない。

○ 高校生、大学生の7割以上が今、何らかの和服を欲しいと思っている。その服種は高校生では振袖、ゆかたに集中し、大学生は訪問着、振袖、留袖など広く希望が分散していて両者に特徴がある。ゆかた以外は今持っていないから欲しいと考えている服種である。母親は47%が今欲しいものはないとしている。なかでは帯の購入希望が高い。

○ 高校生、大学生が和服を着用するのは祭り、正月、盆踊りに多い。大学生は正月、婚礼葬儀、成人式、茶会に高校生より和服着用が高く、公式の場の着用が増している。母親は婚礼葬儀、入学・卒業式の着用が高く、儀礼服としての利用が高い。日常着としての利用も約20%ある。

○ 半数が年1～3回程度の着用である。年齢上昇につれ着用頻度も高くなる。着用回数が少ないのは「着用の機会がなかった」「洋服の方が簡単で便利」「自分で着装できない」が理由となっている。

○ ゆかたも自分で着装できないのは高校生76.7%，大学生56.7%を占める。母親の96.7%は着装技術を身につけている。着装技術は祖母や母に習ったものが多い。

○ 和服の縫製は高校生，大学生ともほとんどできない。母親も自分で縫えない人が33.2%いる。

○ 将来の衣服設計の中で持ちたい和服は訪問着，帯，ゆかた，喪服，羽織が高い。母親が持たせたいとする和服は学生の希望より強い。

○ 和服の所有率，着用頻度，着装，縫製状況に年齢別有意差が顕著にみとめられる。年齢上昇に伴い，和服を多く所有して，よく着用し，自分で縫えて着装できる割合が上っている。和服の新調，購入希望，和服の好き嫌い状況において大学生は特徴を示しており，20代の和服に対する関心の強さがあらわれている。

○ 商工業地区居住者は農山漁村や住宅地域居住者に比べ和服を調整し，着用する機会が多く，着装できる率も高く，和服とのかかわりが強い。特に高校生に，次いで母親にその傾向がある。

東京オリンピックが開催された1964年に内閣総理大臣官房広報室が「和装に関する世論調査」³⁾を発表している。全国106都市75町村における20才以上の男女3,000名を対象としたものである。これによると「和服を着るのが好きか嫌いか」に対して，地域，年齢，収入の差なく，女性の72%が好きと答えている。普段の生活（家庭やちょっとした外出）で和服だけを着ているのが，30%にも及んでいる。和服と洋服の二重生活をしているもの44%，洋服だけのものは，わずかに18%にすぎないことが明らかにされている。そして，これらを紹介している浜田氏は日本の女性は和服に対する関心は強く，将来，和服の需要はいっそう増加すると結論づけている。

1960年代は東京オリンピック開催に関して日本を売り出す気運が強かったこと，合成繊維の和服やウールの着物が売り出され，比較的買いやすい値段で出まわり，和服ブームを高めていたことも影響しているのであろうが，1960年代はまだ和服が女性の衣生活に相当強く根を張っていたことが明らかである。

今回の調査結果から考えると1960年代はこんなにも和服が着用されていたものかと驚かされる。この約20年間に女性の和服離れは，さらに進展したのである。

和服は服種が多く，その着装方法も異なるが，基本的には平面的，直線的に仕立てられた和服を着装時に体型に適合させながら多くの紐をとめ具として使用して立体的に着付けていくため，重厚で煩瑣な衣服となり，体を束縛し，自由軽快な行動をさまたげることになる。活動的で機能的な衣服を中心に日常生活を送っている若い世代に和服は「体をしめつけて窮屈」なものとなって，日常生活における和服離れがすすんできたようである。

だが，ここ約20年間，衣生活の様相がさらに変化し，全く洋服中心に動いているようにみえる現代衣生活の中で，今回の調査結果は，和服が予想以上に生活に強くかかわっていることを明らかにした。特に，日本人に共通な祭祀，儀式，年中行事に和服が活用され，したがって服種も儀礼服の所有や新調，購入希望が高くなっている。行動的な社会にあっても，経

済的に豊かになると、儀式や祭祀に着装する被服類に、より壮重で厳肅なものを求めようになる。社交儀礼の場にあつては、より装飾的な衣服を着用したくなる。ここに和服の着用が比重を占めることになる。

洋服の世界は変化が著しく、軽快である。これに対し、和服は環境や生活などに適応した形で固定し、伝統として温存されていて、生活文化の変転にもかかわらず基本形態に変化がない。儀礼時に和服を取り入れ着用することによって満足感や安心感を得ることができる。和服は「上品で優雅であり、美しい。日本の伝統ある民族服である」と好まれているわけである。

高校生にも高い人気のあるゆかたは比較的着やすく、かつ和服の良さを満たしてくれるものとなっている。

国際化がゆき渡つてきて、民族服は次第に国際服に置きかえられてきたし、今後もこの傾向は変わらないと思われるが、実態調査結果にみる限り、日本人の和服がすっかりなくなるとは考えられない。

今回の調査結果には和服生活の様相を規定するものとして、年齢と居住地の社会環境の影響とが認められる。

年齢の上昇に伴い、和服の所有、着用、縫製など和服生活とのかかわりは強くなる。20代は着用機会は少ないものの興味関心が強くなっており、和服を求める世代となっている。

商工業地域居住者の和服利用状況が特に農山漁村居住者より高い。かつて、衣生活の洋装化が一番早く進んだ市街地において、現在は和服が他地域より、よく利用されているという現象がみられる。ここに、和服がかつての慣習として残存している和服ではなく、多様化した現代の衣生活の1領域として、洋服とともに和服で現代を表現するものとなっているといえる。

和服と洋服を両用することを二重生活と称して生活の簡素化の面から批判的な時期もあつたが、それぞれの特徴を活かし、和服を静的生活、儀礼用に、洋服を動的な生活、日常・実用にと共存する状態が存続していくものと考えている。

服装の問題が単純に実利や合理化だけでは処理できない面のあることを強く感じるものである。

本報を終えるに当たり、調査に協力くださった谷本真知子氏、小田礼子氏ならびに関係者の皆様方に厚く感謝の意を表します。

注

- 1) 日本繊維製品消費科学会 被服構成学要論 P. 72 (1982)
- 2) 鮎田崎子 女子学生の衣生活に関する実態と意識—衣服の取得・調整・着用及び被服製作の状況について—愛媛大学教育学部紀要第I部教育科学第28巻 P. 205~229 (1982)
- 3) 浜田幸雄 消費者の和服観と化合織の課題 化織月報17 P. 56 (1964)

参考文献

- 被服文化協会 服装大百科事典下 文化服装学院出版局 (1969)
家永三郎 日本人の洋服観の変遷 ドメス出版 (1976)
小川安朗 服飾変遷の原則 文化出版局 (1981)

和服に関する実態と意識

関西衣生活研究会 「和服のこれからを考える」研究会 衣生活研究 8・1 P75 (1981)
栢田 庸 1960年代の衣生活 繊維製品消費科学26・1 (1985)